

問題訂正

教科： 国語 (文・教・経 学部)

問題冊子に、次のとおり訂正があります。

問題訂正

- ・科目名：国語
- ・問題冊子 13 ページ
- ・問題番号：問題 三
- ・問題文の はじめ から 4 行目 行末から2文字目

(誤)

夫
レ

(正)

夫
ノ

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

生物としての人間は他の個体と協力することによって大きな社会を作り出しました。さて今後、人間はどうなっていくのでしょうか。

人間の協力性を可能にしたのは、人間のもつ「共感能力」だと言われています。つまり他の人の気持ちになって考えられるということです。これによって他者の望むことを察知し、協力関係を築くことができます。この共感能力は人間が増えることに大きく貢献しましたが、最近の傾向として、この共感能力は人間のなかでますます強化されてきているように思います。つまり人間はどんどんやさしくなっています。

近年、ウシやブタなど動物の肉を食べることについてはしばしば問題視されるようになってきています。食肉の問題のひとつは温暖化などの環境負荷が大きいことだと言われています。たとえば100gのタンパク質を生産するのに、大豆であれば2・2㎡で済むところを、ウシを放牧した場合は164㎡と70倍以上の広い土地が必要になります。また冗談のような話ですが、ウシのゲップはメタンを含んでおり、このメタンが大きな温室効果をもたらしているとされています。

さらに食肉には倫理的問題があると指摘されています。私たちと同じほ乳類であり、ある程度の知能をもったウシやブタを殺して食べることが許されるのかという問題です。私自身は肉が大好きですので、普段から何の疑問も抱かずにウシもブタも食べています。特に罪悪感を抱くことはありません。ただ、それはよくよく考えてみると、罪悪感を抱かなくて済むようなシステムができてきているからのように思います。

たとえば、スーパーの肉売り場ではウシやブタの肉の切り身がきれいにパックされて並んでいます。そこに生物としての姿はもうありません。骨や血液、皮膚、毛、臓器など元の生物の特徴はきれいに取り除かれています。どこか人目につかない場所です。生身の動物から肉を切り離す作業が行われています。マグロの解体ショーはよく見世物になっていますが、あれは魚だからまだ許されているように思います。ウシやブタの解体を見たい人はあまりいないでしょう。私たちは、自分と同じほ乳類を

殺すこと、さらには解体することに少なからぬ抵抗感を持っていることを示しています。

これは人間という生物の特性からすれば当然のことです。私たちは少産少死の戦略を極めた生物ですので命を大切にします。それも自分だけではなく、他の人の命も大切です。それは人間が大きな協力関係の中で生きているからです。私が生きて増えるためには、他の人の協力が必要です。したがって、人を殺すということには大きな抵抗感を持つようになるのは当然です。そしてこの抵抗感は、人間以外の人間とよく似た生物、たとえばほ乳類などであれば（人間ほどではないにせよ）適用されてしまいうようです。

これは仕方のないことのように思います。ほ乳類の体のつくりは人間とよく似ています。ネズミでも、体温、皮膚、骨、血管があり、切ると血が出ます。内臓もほとんど人間と同じセットがそろっています。ふるまいも人間と似ています。イヌやネコを飼っている人であれば、そのしぐさやふるまいに人間らしさを感じることも多いでしょう。人間の家族と同じように扱っている人も多いのではないのでしょうか。彼らは人間ではありませんが、やはり喜怒哀楽があり、好き嫌いもあり、可愛くて時にやさしさも見せます。そのような動物を殺して食べることに忌避感を持つのは当然のことでしょう。

ウシやブタも変わりありません。家でペットとして飼うことはあまりないのでよく知られていないだけで、牧場に行けば人ナツaっこいウシがいますし、ブタをペットとして飼っている人もいます。彼らにもきつと人間と同じような喜怒哀楽があることでしょう。むしろそうしたウシやブタの人間らしさを知らないおかげで、平気で食べることができているのかもしれないかもしれません。もし小型のウシやブタがペットとして広く飼われるようになったら、もう人間はウシもブタも食べられなくなるのではないのでしょうか。そこまでいかななくても、自分が家族のように大事にしているイヌやネコと、今晚のおかずのウシやブタは同じ生物だと一度でも意識してしまうと、どんどん食べにくくなっていくように思います。実際に近年、動物食を控える選択bをする人が増えているという統計結果もあります。私たちは少しずつ、他の動物へも共感の範囲を広げているように思います。

② この人間のやさしさの拡張傾向は、やさしさの由来を考えると少し不思議ではあります。もともと人間が持っている共感能力は他人との協力を可能にしたことで人間の生存に貢献し、強化されてきたものです。したがって、他の人間への共感、世

代とともに強化されてしかるべきです。

しかし、他の生物に対する共感は特に人間の生存には貢献していないように思います。私たちがどんなにイヌやネコに共感し、家族のように扱ったとしても、イヌやネコが人間の生存や子孫の数を高めてくれるようには思われません。過去の人類は、イヌは狩りのパートナーとして飼っていたようですし、ネコはネズミ捕りとして役に立っていたようですが、家族のように扱うよりは、飢餓時には食料として食べてしまえるくらいの距離感のほうが人間の生存には役に立っただけです。ましてやウシやブタに共感してしまったら、栄養価の高い肉という食料が食べられなくなり、むしろ生存には不利益になりそうです。食料になりうる生物に共感してしまうことは「増えることに貢献する能力が強化される」という増えるものの原則に反しているように思います。

このような共感範囲の拡大の原因は、まさにこの共感能力のおかげで高度に効率化した現代社会にあると思われる。まず、過去の人間の社会と現代の人間の社会の大きな違いは、栄養を得ることは生存を決める要因ではなくなっていることです。2019年のデータでは、世界中で生産されている食料を世界の人口で割ると、平均して一人あたり毎日約2900 kcalの食料に相当しています。成人男性でも一日に必要とするカロリーが約2600 kcalですから、この値は世界中のすべての人間に必要な食料は生産できており、適切に分配さえできれば（これが難しいのでしょうか）餓えて死ぬことはないことを示しています。

過去のどの時代においても、生物に必要な食料を得るために競争をしてきました。栄養が得られればその分だけ増えてしまうので、常に栄養は足りない状態になります。ところが現代の先進国においては、栄養は足りているにもかかわらず出生率は落ちていくという、過去のどの生物にもありえなかった状況になっています。この特に栄養が余っているという状況をつくりだせたのは、他人どうしで協力することができたからに他なりません。研究者が肥料を開発し、化学メーカーが肥料を作り、耕作に適した地域に住む人が作物を育て、輸送業者が消費者まで届けるといふ協力体制により、食糧生産と分配を効率化できたことによります。そしてこの協力体制を可能にしているのが、他人との共感です。他の人が自分と同じように協力してくれるという確信があるから、分業が成立しています。

このように大成^③した共感能力は、私たちの中で強化されつつあります。先に述べたように私たちは協力することで成功してきたので、ますます協力的に、やさしくふるまうように教育され、日常的にプレッシャーをかけられています。このやさしさを適用する範囲に線を引きことは容易ではありません。増えることに貢献するのは人間へのやさしさです。しかし、人間と同じように温かな体温を持ち、人間の幼児くらいの知能や体のサイズを持つイヌやネコが周りにいます。しかも、人間がかわいらしいと思うような外見を持っています。この生物に人間の持つ強い共感能力が発揮されてしまうのはやむを得ないことかと思えます。むしろイヌやネコといった愛玩動物はそうなるように(人間の手も入りながら)進化してきているとみなすこともできます。

では^④いったいどこまで進むのでしょうか。私の個人的な予想としては、100年以内にはほ乳類であるウシやブタを食料にすることは一般的ではなくなるような気がしています。現在のジビエ料理のように、一部の好事家の間だけで楽しまれるようになるように思います。その理由は、第一にやはり殺しているところを見たくないくらいに罪悪感があること、第二に環境負荷が大きく実際に問題となっていること、第三に代わりとなる代用肉が用意できることがあります。特に三点目が重要で、大豆を使った代用肉はひき肉であれば普通の人には区別がつかないレベルになっています。今後価格も実際の肉よりも安くなるでしょう。そうなれば実際のウシやブタの肉はだんだん贅沢品^eとなっていくでしょう。

そんな肉も食べられないような未来は嫌だと思われるかもしれませんが、私自身、そう思います。ただ、実際にそうなってみたらすぐに慣れるような気はしています。昔は普通に食べていたクジラを食べることは今はほとんどなくなりましたが、特段困ったことはありません。ウナギも絶滅キグ種^fとなり価格がコウトウ^gしてからはあまり食べることはなくなりましたが、特に深刻な問題にはなりません。他においしい食べ物はいくらでもあるからです。

いずれどんなものにも代替品が出てきます。やっぱり肉が食べたいという人が多くなればなるほど、大豆など肉ではないものから肉そっくりのものが作られるようになるでしょう。結局肉を作っているのも大豆を作っているのもタンパク質や脂質であり、バラバラにしてしまえば成分は同じです。上手に加工すればそっくりなものが出来上がるはず。そして肉よりもい

いのは、加工の段階でもっと自然の肉にはない付加価値を加えることもできることです。もっとおいしい、もっと低カロリー、あるいは高栄養な、消化しやすい人工肉もできることでしょう。そんな世の中に慣れてしまえば、きつともう動物由来の肉は食べるメリットがなくなるように思います。

さて、ほ乳類の肉が食べられなくなったらそこで私たちのやさしさは止まるでしょうか。個人的にはもっと先に進むかもしれないと思っています。それは、ほ乳類を殺すことがなくなったら、きつとすぐに鳥類はいいのか？ 魚類はいいのか？ 昆虫、コウカク類、植物はなぜいいのか？ という議論になるだろうからです。^h

人間は生物を殺すことに抵抗があります。とくに人間と似ているほ乳類のような生物や、ほ乳類でなくてもかわいい生物、花のようにきれいな生物に対してそれは顕著です。そして、私たちは共感しにくい生物であっても、私たちと同じ生物であることを知っています。したがって、すべての生物の命を平等に大切にしたいという考えに行きつきます。結局のところ、殺さずに済むのであれば、どんな生物も殺さないほうが心穏やかでいられます。これは仏教の無殺生の精神に通じるものがあります。

仏教の始祖のブツダは、「すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。わが身に引きくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」といったと言われています。ⁱ この精神は今の時代にも受け継がれています。仏教の修行僧の食事として生まれた精進料理では動物や魚の肉を一切使わずにできています。「命をいただく」という食べ物の命に感謝しながら食事をとるということもこの精神によるものだと思います。これは現在の菜食主義者の考え方に通じるものがあるかと思えます。

ただ、そういったブツダの教えでも、避けるべきは動物の肉であって、植物は許されています。植物だって生物だということとわかっていたでしょうが、植物まで禁止してしまうと当然食べるものがなくて死んでしまうので仕方なく許されていたかもしれません。もしかしたら植物も食べるのをやめた極端な人がいたかもしれませんが、その人は当然死んでしまいますし、その教えに従った人も皆死んでしまいますので、その教えは後世に伝わっていないだけかもしれません。したがって、他の生物の命を大事にしたくても、植物は例外にしないといけないというのが、これまでの無殺生の限界でした。

ところがこの限界は、科学技術の進歩により乗り越えられつつあります。現在のバイオテクノロジーを使うと、原理的には生物を使わなくてもタンパク質などの栄養を作ることができます。そのタンパク質を作るソウチ自体も生物を使わずにつくることができるようになります(まだ完全にはできていません)。

つまり、増えるものを無生物からつくることももうすぐできそうなどころにきています。これは私たちの研究室で進めている研究ですが、このまま研究が進めば、あと十数年でできそうに感じています。これができれば、生物に頼らずに試験管の中でタンパク質を増やして食料にすることができます。そうなれば人間はもうほかの生物の命を奪わなくても生きていけるようになります。「やさしい」人間としてのひとつの理想的な生き方ができるようになるかもしれません。

(市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』による)

【注】 ○ジビエ——狩猟によって捕獲し食用にする野生の鳥獣。猪・鹿・野うさぎ・鴨など。またその肉。

問一 傍線部 a~j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部①「動物の肉を食べること」について、近年どのような問題が指摘されているか、本文に即して四〇字以内でまとめよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問三 傍線部②において、筆者が「少し不思議」と述べるのはなぜか、その理由を本文に即して五〇字以内で説明せよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問四 傍線部③「大成功した共感能力」とあるが、筆者はどのような点から「大成功」と述べるのか、本文に即して九〇字以内で説明せよ(句読点・かつこ類も字数に含める)。

問五 傍線部④「いったいどこまで進むのでしょうか」とあるが、筆者は生物としての人間のどのような傾向がどこまで進むと考えているか、本文全体をふまえて一二〇字以内でまとめよ(句読点・かつこ類も字数に含める)。

問六 次のア～カの記述のうち、本文の内容に合致するものをすべて選び、記号で答えよ。

- ア 他の人間へのやさしさは、私たち人間の生物としての繁栄に貢献し、世代とともに強化されてきた。
- イ 近い将来、人間は動物食をやめ、植物由来のタンパク質を加工して作る高栄養の人工肉を食べなければならない。
- ウ ウシのゲップに含まれるメタンを無害化する技術を開発して環境への負荷を解消することが急務となっている。
- エ 昆虫は温かな体温を持たず、体のつくりも人間に似ているとはいえないので人間が共感することはありえない。
- オ 肉が食べられないような未来は嫌だが、付加価値の高い代替品ができるにちががなく、深刻な問題にはならない。
- カ 人間のやさしさの拡張傾向は、すべての生きものを殺してはならぬというブツダの教えに始まる。

次の文章は、『信生法師日記』の一節である。作者信生は、鎌倉時代前期の武家歌人で、將軍実朝の死後、京で出家した。鎌倉での実朝七回忌供養の後、作者は、信濃国（現在の長野県）の善光寺に参詣する途中、近くに住む旧友を訪ねる。これを読んで、後の間に答えよ。

君に仕へし昔は、和歌の浦波同じ身に立ち交じり、かく世を逃れぬる今は、朝倉山の雲となりぬる人、伊賀式部光宗、谷の苧環をだまきの埋をばすてづもれて、姨捨山あやすてやまのほとりに住むことあり。沈むらむ心のうちもいとほしう、かかる折こそ心の情はと思ひてまかるに、その所にたづね至りて見れば、あやしげなる萱屋かやの、昔のありさま思ひ出づるに、門のほとりにある男おとこ、いかなる乞食こっじきやらむと思ひつるさまにて、かくとは思ひ寄りげなきに、見知りたる男出でて来て、急ぎ入りて、かくと言へりければ、主出で、かたち驚けるさまにて出で会ひたり。まづ涙のみ先立ちて落ち、出づべき言もおほえず。主、「かかる古屋の内にて、短き春の夜も明かし難う、秋の日も暮らし難くて、思ひ過ぐす心の内、ただ思しやれ。」(イ)身に添ふ物とては、昔の面影も、今はましていかでかと思ひつるに、憂きにたへたる命のつらさも、今こそ嬉しうなむ」と言ふ。まことにさこそは、とあはれに推しはかる。幼き子の、かかることも思ひも知らず、まづはり遊ぶに、涙ぐみつつ、「同じさまにて、立ちも出でぬべき心地してうらやましけれど、この身にて、世の恐れも多く、また、かかるほだしさへ振り捨て難くて、心の闇はさこそまどふらめ、とあはれなり。命あらばとて、後会を頼めて出でて、月隈なく侍りしに、その辺近き所より申しつかはす。」

おほかたも慰めかぬる山里に独りや見つる姨捨の月
返し、

(A)物思ふ心の闇の晴れぬには見るかひもなし姨捨の月

この人、善光寺へ追うてつかはす。かの式部こもりゐる侍る所をば、麻績をみとなむ申し侍る。

(B)忘れずはまたも来て訪へ小忌衣見しにもあらぬ袂たもとなりとも

返し、

たちかへりまたもたづねむ小忌衣かくてはいかが山藍やまあゐの袖

【注】

○君——源実朝。鎌倉幕府三代將軍。

○和歌の浦——紀伊国(現在の和歌山県)の海岸。ここでは和歌の道、の意。

○朝倉山の雲——「昔見し人をぞ我はよそに見じ朝倉山の雲のはるかに」(夫木和歌抄・雑二)を踏まえる。「朝倉山」は、筑前国(現在の福岡県)の山。

○伊賀式部光宗——信生の旧友。幕府への謀反に関わり、信濃国に流された。

○苧環——枝も葉もない立木。

○姨捨山——信濃国の山。「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」(古今集・雑上・詠み人知らず)にも詠まれた月の名所。「更級」は姨捨山付近の一带。

○心の闇——「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集・雑一・藤原兼輔)による。

○小忌衣——大嘗祭・新嘗祭の際に、神事に奉仕する者が着用する衣。

○山藍——トウダイグサ科の多年草。葉の藍色の汁で、小忌衣に模様を摺る。

問一 傍線部(ア)～(ウ)を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問二 和歌(A)および(B)を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 次の文章は、鎌倉時代の旅と文学について述べたものである。空欄①および②に入るべき作品名を答えよ。

鎌倉に幕府が開かれたことで、都と地方の往来が活発となり、交通が発達した。その結果、『信生法師日記』や『海道記』『東関紀行』などの旅日記、紀行文も多く書かれることになった。阿仏尼の①は、所領をめぐる訴訟のために京都から鎌倉に下向した際の記録である。また、後深草院に仕えた二条は、晩年、尼になって旅を続けるが、その様子は

②に記されている。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

蟹、水族之微者。蟹始窟穴於沮洳中、秋冬交必大出。江東、

人云、稻之登也、率執一穗以朝其魁、然後從其所之。蚤夜

沸、指江而奔。漁者緯蕭承其流而障之。曰蟹斷、斷其江之

道焉爾。然後攀援越軼、遯而去者十六七。既入於江、則形

質浸大於旧。自江復趨於海、如江之狀、漁者又斷而求之。其

越軼遯去者又加多焉。既入於海、形質益大。海人亦異其称

謂矣。

嗚乎、穗而朝其魁、不近於義耶。捨沮洳而之江海、自微而

務著、不近於智耶。

今之學者、始得百家小説、而不知孟軻・荀・揚氏之道。或知

之、又不^{シテ}汲^{トセ}汲^{トセ}於^ニ聖人之言、求^{ムルハ}大中之要^ヲ、何^ゾ也。百家^ノ小説^ハ、沮洳也。孟軻・荀・揚氏^ハ、聖人之瀆^{トク}也。六籍者、聖人之海也。苟^ハ不^ン能^ハ捨^テ沮洳^ヲ而求^メ瀆^ヲ、由^リ瀆^ヲ以至於海^ニ、是^レ人之智反^{リテ}出^ツ於^ニ水虫^ノ下^ニ、能^ク不^ラ悲^{シマ}夫^ハ。吾是以志^ス夫^レ蟹^ヲ。

(陸龜蒙「蟹志」による)

【注】 ○沮洳——湿地。 ○江東——長江下流の南岸の地域。

○魁——リーダー。ここでは蟹の集団の中の先導者を指す。 ○蚤夜——蚤は早に同じ。朝から晩まで。

○臍沸——わきでるさま。 ○攀援——よじのぼる。 ○越軼——のり越える。

○浸——ようやく。次第に。

○孟軻荀揚——孟軻は孟子、荀は荀子、揚は揚雄、それぞれ戦国時代から漢代にかけての儒学者の名。

○汲汲——一つの事を一心に求めるさま。 ○大中——中正の道。 ○瀆——大きな川。

○六籍——六経に同じ。儒家の經典六種。『詩経』『書経』『礼経』『楽経』『易経』『春秋』のこと。

問一 波線部 a「或」b「苟」c「夫」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「蟹断」について本文に即して説明せよ。「断」の字の意味も含めて説明すること。

問三 傍線部2「然後攀援越軼、遯而去者十六七」を現代語訳せよ。

問四 傍線部3「形質浸大_ニ於旧」を書き下し文にせよ。

問五 傍線部4「如_ニ江之状」とはどういうことか説明せよ。

問六 傍線部5「是人之智反出_ニ於水虫下」について、人の智はなぜ水虫より下だとなるのか、本文の主旨に沿って一五〇字以内で説明せよ（句読点も字数に含める）。